
紅蒼

流雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅蒼

【著者名】

流雅

【Zマーク】

Z6255F

【あらすじ】

紅は裏の世界では名の知れた殺し屋たが、ある日彼は仕事終わりに猫を抱いた少女に出会う、少女は父親の敵討ちがしたいというが

……。

プロローグ

血が流れている。

都内の裏通りに30代後半の男が腹から血を流している。

その血は色鮮やかな紅だった。

そこには血を流している男ともう一人、血が付いているナイフを持った20代の少年だった。

少年の名前は紅、もちろん本名ではない、紅は見たため普通の少年で、ロングコートを羽織っていた。

ヴィーッヴィーッヴィーッ！

彼のケータイが鳴った、依頼人だった。

「依頼は終わつた、死体はこっちで始末しとく」

そう、言い終わると一方的に紅はケータイを閉じた。

彼の仕事は殺し屋だ。

殺し屋。

裏の世界では頻繁に使われる言葉だ、表で起きている殺人事件の2割が殺し屋の仕業と言われている、まあ、そんことを眞面目に調べる命知らずはいないが。

そんな事を考えていると向こうの方から男が来た、男は30代前半で全身を黒い衣服で纏っていた、そして背中には大きな仏壇を背負つていた。

「よお、どうも毎度あり！」

男は低い声でそう、言い放つた。

男の名前は佐藤という、本名か偽名かは知らない。

佐藤は処理屋と呼ばれている、遺体や人殺しをした時に返り血を浴びた衣服等、普通では処理できない物を処理するのを生業としていた。

「遅かつたじゃねーか、何してたんだ」

紅は殺した男の衣服で血の付いたナイフを拭きながら言った。

「いや、前の仕事でアシッドがなくなつち待てな、商人から買つてたんだよ」

アシッドスプレー……特殊な弱い酸を撒いて、指紋や血液等のDNA情報を溶かすスプレーの事だ。

「そうか、それなら仕方がねーな」

紅はタバコをつけながら言った。

「じゃあ、オレはコレで」

佐藤は仏壇に死体を入れて言った。

「ああ、またな」

佐藤は後姿で手を振りながら、いていった。

「さてと、そろそろオレも行くか」

そう思った瞬間、何かが、耳に入つてきた。

「——ヤ——」

「ヤーと確かにそう聞こえた。

見ると裏通りと表通りに接している部分に捨て猫がダンボールに入つて置かれていた、最初は4～5匹、いた跡があつたがそこにもう、一匹しかいなかつた。

そしてその横には高校生くらい女の子が倒れていた。

「はあ？」

それと、同時にタバコが落ちた。

「はあ——」

紅はため息をついた。

最近、20代になつたばかりだというのに苦労が絶えない今日こ

の頃また、苦労の種ができた。

「どおーすんべ、この状況」

紅は横目でベットに猫を抱えて寝ている少女を見る。

少女は16、17歳ぐらいで、今時の高校生とは少し違ったくといつていいほどしていなくしかし、ショートヘアの似合う美少女だった。

「しかし、何で猫なんて抱いてしかもあんな感じで倒れていたんだ」

そんな独り言を呟いた瞬間に少女は起き上がった。

「おなかへった」

少女はオレの方を向いて言った。

「いろいろ、ツツコミてえーがまあ、いい」

そういうてオレは台所に向かった。

少女の名前と目的

「で、お前は何あんなところで猫を抱きながら倒れていた」
紅は即席で作ったチャーハンを食べながら言った。

「行き倒れて」

少女は目線をチャーハンから放さずに、そして、すばやく動く手を止めずに話した。

「猫はどうしてだ？」

紅は足元で寝ている猫見ながら言った。

「いや、お腹が減つて、それで追いかけて捕まえたら倒れました」「えつ、まさかの食用！」

すごく大きな声が出た。足元の猫は部屋の隅に走っていた。

「ハアー……まあいい。お前、それ食つたら出て行けよ」

「わかりました、その前にここら辺に紅という男が住んでいると思うんですけど、知りませんか？」

紅は驚いた、こんな普通の少女が自分の名前を知っているからだ。
紅は意外と有名だが、それは裏世界でしかも殺し屋としてだ。こんなにも普通の少女がなぜ知っているか、しかも住んでいる場所までが。

「お前はその男に会つて、どうするつもりだ」

紅は気がついたら口が動いていた。

「知つているんですか、教えてください！　お願ひです」

少女はさつきとは違い感情的になつた。

「まずは質問に答えろ」

紅は静かに言った。

「殺しを頼みます、父親の敵討ちとして」

少女は堂々と言い放つた。

「敵討ちか、そうか、わかった」

紅は微笑んだ。今の世の中にこんなにも濁つてゐるのに敵討ちなん

て、いう理由で殺しを頼まれたのは初めてのよつな気がした。

「それで、紅はどこに行けば会えるんですか？」

「どうって、ここだよ、コロ」

紅は床を指しながら言った。

「えつ、それってどういう意味ですか？」

今度は自分を指して紅は言い放った。

「だから、紅はオレだよ、オレ」

少女は数分の間を空けて驚きの声を出した。

「まず、あなたの名前は？」

紅はソファーに座りながら言った。

「はい、緋色蒼ヒイロアオといいます」

蒼はそう、淡々と言つた。

「赤か青か、わからない色だな」

「よくいわれます」

「それじゃあ、单刀直入に聞くが、その父親の敵討ちってのは誰なんだ？」

紅は仕事をさつさと済ませたかった。

「それがわからないんですよ」

「はあー」

紅は間の抜けた声を出した。

事件の概容

「それで、お前の父親はどうこう風に殺されたんだ」「紅さんは最近ニュースで話題になつてゐる通り魔つて知つていますか？」

「アレだろ、後ろから刃物で刺して殺して逃げる」

「そうです、私の父はその通り魔の八人目の被害者です」「なるほど。つて、ちょっと待て、それじゃあ犯人の見当も分からないつてことか？」

紅は呆れるような声で聞いた。

「いえ、これが」

そういうつて蒼はA4のノートを出した。

「これは？」

「父の日記です、どうぞ読んでください」

ノートは5、6ページのところに付箋が貼つていた。

10月25日

最近誰かに見られている気がする。

私は人に恨みを買つのような事はしていないが……

10月30日

やはり見られているようだ。
いつたい誰が……

11月2日

今日、私の携帯に脅迫電話があった……

ノイローザになってしまいそうだ。

「日記はここで終わっていた。

「つまり、お前は自分の父が誰かに狙われていたと言いたいんだな」「はい」

「この日記は警察に見せたのか?」

「警察に言つたて、犯人が殺せるわけじやありませんから」
蒼は首を振りながら言つた。

「どうか、よし、じゃあ、もつと詳しい情報を手に入れるか」と
立ちながらオレは言つた。

「えつ、どうやって」

「付いて来ればわかる」

紅はそう言つて、部屋から出て行つた。

「待つてください」

蒼は紅の後を足早に追つた。

ガチャツ

部屋には猫だけが残つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6255f/>

紅蒼

2010年10月14日15時44分発行